建物の角度に合わせて、畳の形も三角に。丸窓の飾りはクワやキリ、竹で作った「雷よけ」だという

広い間口に向かって放射状に延びる天井の梁

撮っておき

建築70年余 色あせぬ技

気仙沼の「武山米店」国文化財指定を答申

歴史を感じさせるたたずまい。1階店舗の屋根と2階の戸袋は銅板製で、深緑に変色している

文部科学省文化審議会が十日、気仙沼市魚町一の「武山米店」の店舗と主屋を国の有形文化財建造物に登録するよう文科相に答申した。これで県内の登録有形文化財は計五十件になる。

武山米店は、整形されていない敷地に家などを建てる技術を持つ「気仙沼大工」によって一九三〇年に建てられた。細長い扇形の敷地に建つ木造二階建て店舗兼住宅が「歴史的景観に寄与している」と評価された。

正面間口が八・四㍍あるのに対して奥間口は一・九㍍。屋根は山形になった切妻造で、天井の梁は放射状に延びる。屋内には、クロガキの一枚板で作った違い棚、三重戸の石蔵などがあり、随所に職人技が生かされている。

「最近まで、急な階段や狭い廊下を不便としか感じていなかった」と店主の武山文英さん(57)。ところが、昨年十月、建築士らでつくる市民グループ「風待ち研究会」の調査がきっかけとなり、様々な工夫の凝らされた貴重な建物であることを知って驚いたという。

住宅には両親の佐吉さん(85)、栄子さん(77)夫妻が暮らし、文英さんと妻のせい子さん(54)が店を切り盛りする。文化財への登録について、文英さんは「建築した先祖と職人の思いを、出来る限り後世に残していきたい」と話している。

(写真と文　柳谷　久義)

読売新聞　宮城県版　2004年12月11日